

## 幕末明治の写真師列伝 第四十二回 内田九一 その七

この内田九一が上野幸馬と共に長崎から神戸へ行ったという逸話の他に、実はそうではなくて、最初に上野幸馬が先に神戸に行ってしまう、それに刺激されて内田九一も後を追うように出京したという話がある。

内田九一は吉雄圭斎の兄の子供で、馬田敬助と仲が良かった。馬田敬助とは、蘭通詞馬田家の養子に入った人で、この当時は馬田源十郎昌房と称し、阿蘭陀小通詞並をしていた人物だ。この馬田敬助にも上京の意志があったのである。そこで内田九一はこの馬田敬助と共に上京しようと考えたのだが、九一には遊蕩のために旅費が無かった。それに九一はこの当時から高価な写真機材を買い込んでおり、器械、薬品、レンズなどに惜しみなく金を遣っていたため、金が無かった。しかし、どうにか馬田敬助の方が旅費の工面をしてくれて、二人はそれで上京することにした。目的地は江戸である。ところが旅の途中の博多まで来たところで旅費の大半を遣ってしまった。このため江戸に行くのも、長崎に戻ることも出来なくなってしまった。そこで二人は相談の上、馬田敬助だけは何とか江戸へ、九一の方は神戸へ行くということになってしまった。おそらくこれは、九一は神戸に居た上野幸馬を頼ろうという考えであったのだろう。こうして九一は馬田敬助と神戸で別れた。この当時の神戸は先にも書いたが、まだ大した港町ではなかった。そのため九一は写真器具類を神戸港で陸揚げしてから、また人夫を雇って、別の船で大阪へ行くことにした。大阪に到着するとすぐに改元となり、元治元年(1864)になったという。

このどちらの逸話が正確で正しいのかは、今後の内田九一研究の課題の一つであろう。ではそんな内田九一はいつ神戸から大阪に行ったのであろうか？

これは他の諸書、例えば『写真新報』、『月乃鏡』では以下のように記載されている。「氏既に業を卒ゆ、即ち師を辞して郷開を出で、遠く京阪の間に遊ぶ、時に慶応元年なり、居を大阪船場に構へ、時に出で、名勝風景を撮影し、其技量漸く世に現わる、人の勤むるに任せて順慶町に寫眞業を開く。」(『写真新報』第162号の原田栗園「本邦寫眞家列傳(其十四)・故内田九一」より)「慶応元年大阪に出で、上野鎗屋町に寫眞を開業し幕士の知遇を受くること多し」(『月乃鏡』の「故内田九一先生」の項より)

また、『幕末の武家』によると、「それから私が長崎を去った後、長州征伐で將軍家の御供をして京都に逗留しておった時、或る日丸山に行く道の料理屋で飲んでおると、突然九一がやって来たから、どうして来たか聞いたら、このたび先生は御供で京都にお出でということゆえ、はるばる長崎から来た。途中は写真を写し写し上って来たとのこと。紙写しをする写真師のこれこれという者が、今度長崎から来たと、松前御老中に話したら、この人も大層こういうことの好きな人ゆえ、幕府に抱えようとのことで、その旨を九一に伝えたところ、一生三十人扶持ぐらいで縛られるのは嫌だということだ。そこで私が大坂で開業したらよいだろうと言って、大坂の石町で写真の店を

始め、たいそう流行した。」(柴田宵曲編『幕末の武家』の「松本蘭時」の項より)

これによれば、内田九一は慶応元年(1865)、彦馬の弟幸馬を連れて神戸福原遊郭で天幕式の仮写場を一緒に開業してみるが、どうしたわけか、さらに幸馬とは神戸福原で別れて大阪に向かう。しかし、内田九一は松本良順が京都にいることをどうやら知っていたらしい。おそらく將軍が上洛していることを知ってそれならば將軍の御典医として松本良順も京都に来ていと推察したと思われる。内田九一はこの松本良順に会いにまずは京都に行くのである。

何とか京都丸山で松本良順に会えた内田九一は松本の幕府に勤めたらという薦めを断って、その助言をいれて大阪で写真の店を開業することにした。そこで大阪まで戻ると取りあえず大阪船場(大坂順慶町)あたりに住むことにした。内田九一が慶応元年に最初に写場を開いた大阪順慶町は今の南船場辺り。かつて戦国大名・筒井順慶が屋敷を構えたところと言われている。幕末大阪の中心は、心斎橋筋とこの大坂順慶町と交叉する辺りで、当時、大阪最大の傾城町といわれた新町廊のある新町通りと丁字形に連絡して大変な賑わいであった。

また、後に第七代大阪商業会議所会頭となった土居通夫が慶応年間時代に大阪にいた当時の頃を語る、『土居通夫君伝』及び、『通天閣 第七代大阪商業会議所会頭・土居通夫の生涯』によると、「當時石町に小曾根正雄といふ長崎の人来りて寫眞館を開業せり、小曾根自身は技術に於て左程上手といふにあらざりしが、技師には内田九一を傭ひ、自分は館主の名儀となり、以前長崎奉行勤めし頃相知れる大久保肥前守が今京都の町奉行となり居たるを便り、其斡旋により大阪在城の旗下以下を花主として営業頗る繁昌せり。(中略)長州征伐に随従したる大阪在城中の事なりしといふ。」

第一次長州征伐で將軍家茂が上洛したのは慶応元年(1865)5月のことであることから、慶応元年(1865)5月頃には、内田九一がすでに大阪にいたことがこの記述からわかる。また、この大阪時代の内田九一の名が評判だったことは、篠田鉦造が幕臣の旗本の古老から聞き残した話『幕末百話』の中で、次のように伝えられている。「第二の写真は長州征伐の時で、私共大手前は御中軍と称して、將軍警衛で、大阪表まで赴きました。大阪表の写真師は、天満橋向の「九一」というがその頃名人でした。紙写三枚で代価は三分を払ったです。」この、「幕末百話」の「紙写三枚で代価は三分を払ったです。」ということから、この頃の写真撮影の代価が、鶏卵紙焼付三枚で三分であったことがわかる。

さらに『東洋日の出新聞』の「日本写真の起源」(十三)によれば、「(前略)江戸へ行く途中に大坂で様子を見た所がまだ写真等を知ったものは一人もない此処で行ったら儲かるだろう江戸に行けば當はあるものの素手でも行かれず多少の籠城費があるが善いといふ訳で大坂に開業した所が矢張珍らしいので段々大繁昌で金も溜まった(後略)」という。

(森重和雄)